様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５９０２２７

研究課題名（和文）「苦難」をめぐる北海道家庭学校寮長藤田俊二日誌の教育思想史的研究

研究課題名（英文）A Historical Study on the Diaries of Syunji Fujita, a Teacher at the Reform School Hokkaido Home School: Focusing on the unjust hardship and its meaning of education

研究代表者
河原　国男（KAWAHARA, Kunio）

宮崎大学・教育文化学部・教授

研究者番号：００２０４７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、北海道家庭学校寮長藤田俊二（1932～2014）実践記録一覧を作成するとともに、一寮生について記述した未発表原稿「誰れが悪いのでも無い」の全文を公表し、その教育学的意義を検討した。その結果、本人には罪過がないにもかかわらず引き受けなければならない「苦難」（「罪なき苦難」）に共感しつつ、少年の不運な境遇を藤田が理解しようと努めていたことを明らかにした。この論証を通じて、藤田の実践の場合ユーモアの力とともに「罪なき苦難」経験が自立をめざす決定的な契機として重要であることを究明した。そして、生に対する配慮の行為を重視する藤田の実践は、教育の意味を根源的に問いかける意義があることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：Through this study, I aim to prepare a chronological list of the practice records of Syunji Fujita (1932ー2014), a teacher at the reform school Hokkaido Home School. In addition, I intend to consider the pedagogical significance of Fujita’s manuscript 'No One Is to Blame', which describes an impressive pupil and was published by myself in 2014. Research has revealed that Fujita strove to keep track of his pupils’ careers; moreover, he was sympathetic toward his pupils and the unjust hardships they had to endure at home. Fujita’s practice records show us that both unjust hardship and humour were significant factors in cultivating a sense of independence among his pupils. It follows from this that Fujita’s practice, which emphasised the act of caring, poses radical questions about the meaning of education.

研究分野：教育思想史

キーワード：北海道家庭学校　藤田俊二　教育実践記録　罪なき苦難　魂への配慮　留岡幸助　ヴェーバー　ユーモアの力

１．研究開始当初の背景

(1)1914(大正 3)年感化院・北海道家庭学校を創設した留岡幸助（1864-1934）については、その日記や著作集がすでに刊行され、室田保夫『留岡幸助の研究』(1998)、田沢薫『留岡幸助と感化教育』（1999）などの実証的な研究がある。戦前期の北海道家庭学校の歴史についても、数は少ないが、二井仁美『留岡幸助と家庭学校』（2010）などの先行研究がある。同学校に関する基礎資料については、とくに二井氏によって、調査整理が進められている。戦後の教護院時代の北海道家庭学校の生活については、寮長としてもかかわった社会学者花島政三郎『サナプチの子』（1978）が詳細に記述している。また、花島『10 代施設ケア体験者の自立への試練』（1998）は、教護院入所から 20 才までの軌跡について 46 の事例を詳細に記述し、少年たちの変容を種々の角度から分析している。以上のような北海道家庭学校についての研究が蓄積されていた。

　その一方、戦後の同校については、なお課題が残されていた。1）戦後の校長留岡清男(1989-1977)の生涯・実践・思想についての本格的な研究。2)清男の後任として卓越した指導性を発揮した谷昌恒（1922-2000）校長の生涯・実践・思想についての研究、3)校長以外の同行者たち（寮長・寮母）の事跡についての研究、などの諸課題である。

(2)本研究で取りあげる戦後の北海道家庭学校の寮長・藤田俊二（1932-2014）ついて、河原はその生涯（2012 年まで）を年譜の形で研究論文として明らかにしている。「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 27 号、2012.8、pp.21-52。

(3)藤田が残した実践記録のうち寮生 145 名についての日誌中、3 名の日誌について、抄録した形であるが、藤田は『もうひとつの少年期』として 1979 年公刊していた。河原はこの 3 名の原本日誌も含め、その全体を藤田本人より託され、勤務大学の講座研究室に 2006 年より保管し、整理している。その後、データ入力を継続してきている。本研究にとって、最も重要な事例を提供している一少年についての藤田の日誌も、すでにデータ入力している。

(4)プロテスタント系キリスト者でもあった留岡幸助が宗教的に拠りどころにしている聖書、とりわけ旧約聖書の成り立ちを比較宗教社会学研究の一環として社会史的に研究したマックス・ヴェーバーの『古代ユダヤ教』（1917-19）について、河原は教育思想史的な問題関心から研究に着手してきた。そして、旧約聖書（「ヨブ記」）のなかの「罪なき苦難」の概念が、古代イスラエルの“共助”を理念とする教育共同体にとって、重要な位置を占めていることをヴェーバーの社会史研究中に見出し、跡づけた。「M.ヴェーバー『古代ユダヤ教』における政治教育共同体の認識とその史的意義−教育の史的起源としての「魂への配慮」−」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、29 号、2013.8、pp.55-73。

２．研究の目的

　本研究は、北海道家庭学校・石上館寮長藤田俊二の実践記録を取りあげて、本人には罪過がないにもかかわらず引き受けなければならない「苦難」(「罪なき苦難」)を中心的概念として着目し、その概念が「神義論」として宗教的に意味あるにとどまらず、個人として、あるいは集団として試練の意味をもった人間形成にとっても、いかに重要な基盤的契機となっているかを教育思想史的にアプローチから実証的に解明することを主要な目的とした。こうした研究を通じて、「苦難」を向きあうことを人間形成の基盤的契機とする事例を根源的次元から発掘し、「教育」概念の再検討を促す挑戦的萌芽的研究として位置づけた。

３．研究の方法

(1)上記の目的のための主たる検討の資料として、藤田俊二が 30 年の在職中（1963-1993）に残した実践記録の全体像を 1）日誌、 2)報告、3)著作、4)論説等、5)その他、と分類し、とりわけ日誌を中心に継続的に調査し、一覧にして整理した。

(2)実践記録のうち、「罪なき苦難」の想念をもっとも顕著に表している実践記録として、「その他」に属する未発表原稿「誰れが悪いのでもない−　ある父子 1994 年 2 月までの日々−」（400 字詰原稿用紙 157 枚、以下、未発表原稿、あるいはたんに原稿と略記）の全文を藤田俊二本人及び同夫人の了承を得て公表した。

(3)未発表原稿で藤田が主題として設定した事項を具体的に明らかにするため、原稿で取りあげられている、実在し、石上館で暮らした当該少年についての藤田の日誌(大学ノート 3 冊,1981.8.11-1982.3.14)の内容にかかわる諸事項を対照比較して、どの部分が強調され、どの部分が除外、抑制されているかを比較検討した。

(4)その原稿が示す特質と意義を究明するため、「試練」の重要性を指摘していた創始者留岡幸助の論説と関連づけた。また、ユーモアの意義を説く藤田の特質を強調するため、藤田と同時代の校長谷昌恒の役割と対比した。

(5)北海道北斗市在住藤田俊二に直接面会しインタビュー（2013 年 11 月 5-6 日）して、「罪なき苦難」にどう向きあうことができるか、という点が主題として設定されているのではないか、また、この仮説と関連して、少年がみずからの境遇を乗り越えて、たくましく生きる力としてユーモアの力が、同程度の重要度で日誌全体を通じて一貫して強調されているのではないか、という点について確認した。

6)原稿の内容に対応する当該少年の事実関係、とくに北海道家庭学校の在籍に関する事実（退所年月日）を確認する必要のため、同校において特別な許可を得て学籍簿の記載を確認した。

４．研究成果

(1)藤田の実践記録を、人間が対象（自然、社会、個人）に目的意識的に働きかけるという基本構造をもった活動過程に関する記録として「実践」概念で把握し、その基本的性格を明らかにした上で、1)日誌、2）報告、3)著作、4)論説等、5)その他、と全体像を区分し、具体的な細目（表題、発表年月日、巻号、など）を一覧にすることができた。現存する日誌については、匿名を厳守しているので、整理番号（1～147）を付した。

その一覧作成に際しては、まずは全体像を紹介することに重点をおいたので、「実践」を成り立たせる個々の要素の検証は掘り下げてはいなかったが、働きかける活動過程であるがゆえに可能になる対話的交流の一場面について、次のように、藤田自身による日誌の当該箇所と、それに対応する少年自身の日記との対応関係を具体的に明らかにすることができた。

1981.11.6 少年(整理番号 85)の日記「今日の全校作業」:

今日は午後から全校作業があり、カツラの苗を植えました。前の松の植林の時とは違い、とても手間のかかる作業でした。僕は最初、山林部の植林ぐわで一個目の穴を掘っていましたが、なかなかくわではやりにくく、しかたないと思いつつ頑張った。そして二個目の穴は、大きな木の近くなのでその木の根っこが沢山出ていて、その根っこを切ろうとして植林ぐわを大きく振ってグサッと力いっぱいさした。するとくわは直径１０㎝もあるような大きな根にささったままで、抜けなくなってしまいました。そこで、頭に来て、グイっとふんばったら、ボキッといったので、やった！根が切れた！と思ったら、くわが折れてしまった。これからは物を大切に使っていきたいと思う

同年同日の藤田の日誌:

桂林寮から展示林に至る林道左側に大きな桂の苗木を１００本全校で植えての午後、この桂が成長して見事な並木をつくる３０年後を思い、何かしんみりした気持になっていた。その頃保坂は４５才！いい家をなしているだろうなあ！～～～。
鍬を１本折ったことも年月の中に埋もれてしまうよ～

ここに紹介したのは、一例であったが、藤田の実践記録の全体を成り立たせる重要な対話的契機として位置づけることができる。

こうした実践記録一覧作成の上で、「その他」に分類した未発表原稿のフル・テキストを公表し、その意義を掘り下げることができた。

(2)「誰れが悪いのでもない」名付けられた藤田の未発表原稿には、ヴェーバーが『古代ユダヤ』において強調した「罪なき苦難」の観念と類似する苦難の経験が、一少年の日々に即して記述されていた。原稿には、藤田が少年の近親者を訪問し、生育環境を確認するとともに、少年の過去の日々が、実父、継母と義妹と暮らしながら不遇な生育環境であったことが中心的に記述されている。その不遇な経験について推知させるものとして藤田が日誌と同様に原稿でもふれているのは、少年が下村湖人「次郎物語」に深く共感していることを読書感想文で明らかにしていることである。

長文であるが、原稿のなかの該当箇所を一部省略して紹介する。

一月二十一日

「先生、朗読会では読みませんけど、読書の感想文を書いたので持って来ました。読んで下さい。」

とわざわざ言いに来て持って来た。

寡黙な幸策は、人が喋ったり笑ったりしている時はほとんど本を読んでいる。今読んでいる「こころ」の感想文かなと思って受け取ったら、下村湖人の「次郎物語」の感想文、

里子に出された幼名虎太郎、後の二郎がたどった幼ない心の軌跡の物語、幸策がどの様に読みとったか急に興味が湧いて来て一気に読む。

「僕は去年の七月十日に仙台少年鑑別所に入り約一ヶ月間の間に色々な本を読みました。その中には五日間かけてかかって読んだ『次郎物語』があります。次郎物語は下村湖人という人が書いた第一部から第五部までの自伝のような長編小説です。でも次郎物語は作者の死によって未完成のままで終わりました。

物語の主人公は小さい頃は虎太郎といい五才から次郎とよばれ、次郎は生まれた時は猿みたいな顔をしていて、おばあさんや母は

「なんて小にくたらしい顔をしているんだろう」と思ったそうです。母は乳が出なかったので、田舎の学校の用務員室に住んでいるお浜という女の人にあづけられて育ちました。
　やがて次郎が里子から帰って来た時は、本田家が嫌で嫌で毛嫌いしました。そして毎日ひねくれてばかりいました。そしておばあさんは、母さんのお民が居ない時に食べ物で次郎をいじめるのです。
　そんな或る日、次郎は何故か別の部屋にあったお菓子の入っている箱を見つけて、その箱を壁にたたきつけて踏んだり蹴ったりします。又、その他に兄の小学校の教科書を便所に投げたりしました。そのようにいつも次郎は家庭に仕返しばかりして来ました。・・・

　僕はこの次郎の根性が好きです。そのあとしばらくして次郎は母さんを失ないました。それからの次郎はまるっきり性格が変わり、本当にすごい成長をしたなと思いました。
　僕はこの次郎の苦労したところと、その後の成長した姿がとても好きです。小さい時から苦労したり我慢したりした次郎の様に、僕もそういう生き方をやってみたいと思います。
　次郎物語は第五部で未完成のまま下村湖人という人は亡くなりましたが、その後の第六部、第七部も読みたかった気もするし、第五部で未完成のまま終わっているからその後の次郎の姿を想像できるからいいという気もして、今もそのことを時々考えています。」

　去年の七月に読んだ「次郎物語」の感想を今になってもこの様に刻明（ママ）に書ける幸策の気持ちを思い、次郎と自分の人生をぴったり二重映しにして今を生きている幸策の凛とした気概を思い、今日も又いい文を読ませてもらった。
　そして、いつの日か大人になった幸策と、今幸策が黙々と読み続けている夏目漱石の「こころ」について語り合える日の来るのがとても楽しみになって来た。

　以上の感想文についての藤田の記述も含め、当該少年についての日誌の記述と、原稿の内容は－　少年の氏名、出身地、入所時期、などは別として－基本的事実関係において違いはなかった。その一方、日誌には記述されていたが、原稿には記述されていない見逃しがたい部分があった。少年が日々の生活のなかで示していたユーモアの一面である。

　1981.9.25 藤田の日誌(整理番号 89)
　午後から酪農部のサイレージ応援に行って来た。長いホークでの草積み、草をいっぱい積んだトラクターに乗って大きく揺れながらの往復、サイロの中での草ふみ！そのひとつひとつに歓声をあげては遊んでいた皆の中で、ともの静かな笑いはたしかに異質だった。暗く沈んでいるという訳ではないのだが、小さく皆のふざけ合いに眼をやるだけのともの微笑・・・・には、なんだか俗っぽい事をきっぱりと拒否する司祭の様な別の微笑があった様な気がしているである。

　入所後約１か月後に示した少年の「微笑」について記述されている。この少年に限らず、少年が日々の生活のなかで言葉や振る舞いとして見せる「ユーモア」や「微笑」については、藤田は積極的に記述しているが、当の原稿ではふれられていなかった。そうした選択態度に本研究では着目して、原稿「誰れが悪いのでも無い」が、苦難の経験について自覚的に主題化していることを把握することができた。

(3)藤田自身も先駆者として導きとする留岡幸助の初期の論説に、「人生は試練なり」（1897,明治 30）がある。後に家庭学校礼拝堂正面に掲げられる扁額「難有」の理念と同じ意味を論じたもので、苦難することの教育的意義が説かれている。そうした幸助の論説と藤田に原稿内容との関連が跡づけられる事情は、ヴェーバー『古代ユダヤ教』から導いた「罪なき苦難」の概念枠組みが、けっして恣意的な参照ではなく、一連の学校史の系譜として内在的根拠をもっていることを示していた。ただしその場合、留岡は「罪の無い」苦難に限定して捉えているわけではない。少年が遭遇する人生上の苦難一般の意義が取りあげられていた。その点では、藤田の「誰れが悪いのでも無い」という想念の方が「罪なき苦難」の概念に近い位置にあった。

(4)「罪なき苦難」の概念に近い藤田の「誰れが悪いのでも無い」という想念が示す教育学的意義について。この想念は、少年の日々の生活に即した人間形成の様相にかかわるものだった。その場合に藤田は、少年についての日誌の記述全体がそうであるように、自分自身の取組について「教育」ということばでは把握してはいない。家庭学校の機関誌「ひとむれ」や啓蒙的な一般誌に掲載された論説等などでは、某心理学者の著作『少年期』（1950）とは区別されるべき「もうひとつの少年期」という所見や、「非行少年という少年はいない」という主張とともに、「教育」の在り方や、義務教育の課題について問いかける姿勢は藤田のなかに見出すことはできる。藤田に「教育」認識が不在であるどころか、むしろ鮮烈に数%の少年の日々に光を当てその教育の必要を問いかける意識を確認することができる（『もうひとつの少年期』はじめに)。けれども、当該少年についての日誌も含め、日誌に限っては、一人一人の生活上の姿とその内面そのものの具体的事実の記述に徹して、「教育」という用語では記

述してはいなかった。それにもかかわらず、あるいは、まさにそのゆえに、その日誌の場合と同様に、原稿における藤田の記述には、藤田自身の自覚とは別に、意図的な人間形成の意味で「教育」とはなにか、という問題を根源的次元で提起している。その場合、少年に見出されるユーモアの力とともに、罪なき苦難に向きあいながら、その少年の生（魂）をどう配慮して、自立的成長をうながすか、という課題設定を人間形成の不可欠な契機(姿勢)とするものだったことが特記される。

(5)少年についての未発表原稿「誰れが悪いのでも無い」が、藤田の自覚を超えて提起している、どう生を配慮するか、という問題は、今後、他の複数の日誌とともに、その実践構造が究明される必要がある。現代教育学研究で追求される「ケア」概念、「臨床教育」などの概念と重なる部分があるだろう。こうした隣接概念とともに、系譜的に検証していく必要があるのは、「魂への配慮」(Seelsorge)という概念である。ヴェーバーが『古代ユダヤ教』で、教育の史的起源を示す行為として指摘したものであるが、現代的教育課題をも視野に入れることができるものとしても、今後の検証が求められる。

(6)ユーモアの力を期待しながら、少年一人一人にかかわり、それぞれの生に配慮してゆこうとする姿勢が、家庭学校の歴代の教師たち（留岡幸助、留岡清男、谷昌恒など）と対比して、藤田（1932-2014.7）において特徴的ではないか、という関心から本研究の一環でインタビューしたが、その様子についてビデオ収録(2013.11)することができた。病身であることが判明する前で、逝去する半年前の証言記録として貴重な成果となった。その内容について、いずれ公表したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

・河原国男「北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧」、『宮崎大学教育文化学部紀要』、教育科学、査読無、第 31 号、2014.8、pp.87-131。

http://opac2.lib.miyazaki-u.ac.jp/webopac/e31_p87-131_cover._?key=SQOAPR

・河原国男「藤田俊二 未発表原稿『誰れが悪いのでもない−ある父子 1960 年から 1994 年 2 月までの日々 −』− 本文及びその主題設定の意義−」同上紀要、教育科学、査読無、第 32 号、2015.3、pp.11-80。

６．研究組織

(1)研究代表者

河原　国男（KAWAHARA,Kunio）
宮崎大学教育文化学部・教授
研究者番号：00204751